

# イリイチの思想と公共訓練(1)

埼玉県立川越高等技術専門学校飯能分校

戸引 一則

## 1. はじめに

単なる市場原理から「公益」が自然発生的に出てくると考えるのは幻想であり、公共的ルールや公共政策など、何らかの公共性の次元が存在してはじめて、公益の実現が担保されうると東京大学教授山脇直司氏は言う。またI. イリイチは、市場原理を機能させるために必要な義務的消費志向をもつ人材を、教育機関が効率的につくり出しているという現実こそ最も深刻な問題であるとして、学校化された制度そのものを批判した。イリイチは市場原理を前提にした現代の学校制度を、公共的に善きものとは考えない。依存する体質をつくり上げ、若者の自立共生の道を閉ざすものとして学校を厳しく批判したのである。公共訓練は、雇用についての依存体質をつくるための機関であってはならない。自立自存のために技能を身に付けることを、そしてその過程を通じて働くことの意味を確認させる場であるべきではないか。

人間性の回復のために、産業文明の根元的な問題を問い続けた思想家I. イリイチの著書から、前期思想の総論である「コンヴィヴィアリティのための道具（日本エディタースクール出版部，1989）\*<sup>1</sup>」、学校という制度が抱える問題を指摘した「脱学校の社会（東京創元社，1977）\*<sup>2</sup>」、労働における人間性とは何かを問う「シャドウ・ワーク（岩波現代選書，1982）\*<sup>3</sup>」を題材に公共訓練の当為について考えてみたい。

## 2. コンヴィヴィアリティのための道具

相互親和性とは「産業の生産性とは対立する」もので、「人間の間および人々とその環境の間での自律的で創造的な交流」と「1人ひとりの人間が相互に依存することのなかに実現される個人の自由」を意味し、相互親和的社会とは「その社会の構成員1人ひとりに、その社会のなかにある道具を最大限に利用できるような保証を与える措置がとられた結果生じる」ものであるとイリイチは定義した。科学技術の進歩は、自己決定権の侵害のみならず自己決定能力をも不具化しようとするが、科学技術が管理する側ではなく、相互に結びついた個人に仕える社会のあり方を、自立共生的（コンヴィヴィアル）とイリイチは呼んだのである。

産業主義の制度には、2つの分水嶺があると言う。医療についていえば、1913年が医療の歴史の第一分水嶺で、この年を境に医学校卒の医者から専門的な処置を受ける機会が50%を超すようになり、以来医学は病気と処置を定義し続けることになった。そうして医療従事者が合法的に医療行為を行うための訓練期間はますます長くなり、健康維持は美徳から一転して科学の祭壇で専門的に執り行われる儀式に変わってしまったとイリイチは嘆いた。さらに1950年代の半ば、医療が第二分水嶺を越えると、新しい病気が定義づけられ、制度化され、健康管理における良識と伝統的な知恵は失われていった。他の産業主義的諸制度も、最初の分水嶺では科学的な測定手段は新しい効率を説明するのに用いられたが、第二の

分水嶺になると、それまでの達成によって立証された進歩が価値のサービスの理論的根拠として用いられるようになった。産業主義的發展が第二の分水嶺を通過したことで、人々を脅かしている側面が六つあるとイリイチは言う。

- ① 過剰成長が、人間が進化してきた環境の基本的な物質的構造に対する人間の権利を脅かしている。
- ② 産業化が自立共生的な仕事をする権利を脅かしている。
- ③ 人間を新しい環境に合わせて過剰にプログラミング（計画化）することが、創造的な想像力を麻痺させてしまう。
- ④ 生産力の新しい水準が政治参加の権利を脅かしている。
- ⑤ 古いものを強制的に廃してしまうことが、言語や神道や道徳や審判における先例の源泉である伝統を生かす権利を脅かしている。
- ⑥ 強制的な満足のおしつけが生み出した広汎な欲求不満。

### 3. 公益・共感・ネットワーク

電話と郵便のネットワークは、それを用いることを欲する人々のために存在するが、高速道路網は自家用自動車のアクセサリとして役だつだけであるとイリイチは断言した。前者は真の公益事業であるが、後者は自家用車およびトラックやバスの所有者たちへなされる公共のサービスであり、多くの人々が利用できるように遠くまで広げられたネットワークと、限られた地域内で特権者のみが利用できるネットワークとは、根本的に異なるものとして区別したのである。「脱学校の社会」は30年も前の論文で、肥大化した公共部門の処理が避けられない問題となっている現在とは、状況が全く違うことはいうまでもないが、30年も前に高速道路の公益性について問題提起したこと、そして電話や郵便と高速道路を対極に論じているところが興味深い。イリイチにとって両者は決して同じではなく、人間中心の思想家はプラグマティズムによってのみ是非を論じることを良しとはしなかったのである。すでに電話通信事業

が市場に開放されたが、そのことでサービスは多様化し、新しいサービスやビジネスモデルが登場するようにはなった。しかし市場が活性化しているのは都市部に限られており、サービスの格差は広がっているともいわれる。また、サービスの向上が人々の依存傾向を増長している側面があることも否定できない。

共感をもとにしたコミュニケーションによって公共世界が構成されるとするヒュームの原始的市場原理の思想に対して、共通の利害感情を有するローカルなレベルでの公共世界しか語れないという懸念はあったが、情報化社会となった現代では共感もグローバル化して、開かれた公共世界が求められるようになった。70年代のパーソナルコンピュータ革命がコンピュータの能力を大衆に開放した意義は大きく、今日のIT時代に至る道のりは科学技術が人間性を解放したかにみえる。しかしイリイチが夢見たように、コンピュータや通信による情報ネットワークがコンヴィヴィアリティのための道具となり得たのであろうか。ローカルなレベルでの共感、変質することなく拡大されたであろうか。

ものづくりにおいては、つくり手と使い手の信頼関係が経済社会と公共世界との接点となる。物資が不足していた時代ではCS（顧客満足）は最小限に押さえられるが、環境を破壊するほどに生産性が高められ、量から質の時代、高感度消費の時代になると、つくり手と使い手の立場は逆転する。しかしそのどちらの状態も、信頼関係の上に成り立っているとは言いがたい。

海外の無農薬バナナを購入している生協グループは、キログラム当たり20円を飢餓を救うための基金として支払ってきたと言う。価格を買いたたけば、生産側は大量生産と大量供給に走らざるを得ず、それでは供給側と消費側が分裂したままで、消費者側は満足と安心を手に入れることはできない。つくり手と使い手の関係は、もっと人間的で濃密な関係であるべきであろう。価格破壊の意義は、値段を決める価格決定権を製造業から消費者に近い流通に奪取ったことであつたといわれ、これを第一次流通革命と呼ぶと、第二次流通革命は消費者の多様な価値

観に応じて多様な商品を品揃えすること、すなわち選択の自由を提供することであった。そして第三次流通革命は、安心を提供することになると考えられている。「安くても拒否する」これが時代を切り拓くキーワードになるとジャーナリスト内橋克人氏は言う。つくり手と使い手が接近していた産業革命以前の世界と同じように、安心が求められるこれからの世界において、経済の公共性は実現され得るだろう。そしてそのために欠かせないのは使い手の公共的役割であり、それ以上につくり手の公共的役割である。この両者の認識の上に立ってはじめて公共訓練の多様な広がりがある現実のものとなるだろう。ヒュームの共感の原理は、精神世界における利害関係をも含むものであると思う。経済における効率性からだけではなく、価値観の共有により共に得た利益から生じる共感が両者の強い信頼関係を築くことになり、そうしてイリイチが夢見た自立共生のための情報ネットワークも現実のものとなるだろう。

「私益の追求は、信頼関係と公共益によって規定される」と山脇氏は言う。信頼関係が前提としてあること、そして職業訓練の公共益がはっきりしているならば、私益の追求は規定され、市場原理をよりどころとした公共訓練のオルタナティブも可能になると考えられる。

#### 4. 希望と期待

学習は他人による操作が最も必要でない活動であるとイリイチは考える。かつての大学は、発見や新旧の観念についての議論のための解放区であり、学問的探求と風土的不安定とに特徴づけられる共同社会であったと言う。しかしゲーテンベルク以来、批判的探求は印刷物に置き換えられ、学生は大学で勉強することを経済的に最も有利な投資とみなし、国は彼らを国家発展のための主要な要素とみなすに至る。そうして希望を期待で代用することを教えられ、教えられる習慣に中毒していくことになる。希望とは「自然の善を信頼する」ことであり、「われわれに贈り物をしてくれる相手に望みをかけること」である。それに対し期待は「人間によって計画され統制される結果に頼ること」を意味し、「自分の権利とし

て要求することのできるようなものをつくりだす予測可能な過程からくる満足を待ち望むこと」であるとイリイチは定義した。

「仕事はその仕事に利用できる資金や人材の拡大とともに増大する」というのがパーキンソンの法則だが、永遠の進歩は終わりのない消費を意味するのであろうか。生涯教育という言葉がある。学校で、制度に依存することと、消費し続けることを教えられた人々は、一生涯教育され続けられることを望むようになる。公共訓練がこのような学校化された制度の一部に組み込まれてはならない。人々は生涯自らの意志で、希望を抱いて学習し続ける存在でなければならない。学校によって教え込まれる制度化された価値は、数量化された価値でしかないが、人の成長は測定のできる実体ではない。理想的な学習とは、測ることのできない再創造であるとイリイチは言う。測定するように教育されてきた人々は、測定できない経験を見逃してしまう。自分のなすべきことをする (do) ということや、本来の彼らになる (be) ということ忘れてしまい、つくられたもの、つくり得るものだけを、価値があると考えようになっていく。

しかし一方では、グローバル化のための標準化には測定することが不可欠ではある。またヴァナキュラーな活動とは地域固有のものであり、その背景には文化というその地域の人々の行動や考え方を規定する固有の制度があるといつてよい。これらの矛盾をイリイチは「コンヴィヴィアリティのための道具」によって解消している。「コンヴィヴィアリティの道具」には、方法や制度をも含まれると考えてよい。70年代にすでに、今日のインターネット時代が到来することを、この言葉に希望を込めてイリイチは予言していたのである。すなわち測定すること、そして制度全体を否定するものでは決してなく、社会のエートスの変更をイリイチは求めていたのである。われわれがなすべき選択は、根本的に対立する操作的制度と相互親和的制度 (convivial institution) のどちらを選ぶかということであり、公共訓練の制度が後者でなければならないことはいうまでもない。

若者たちは、彼ら自身の知識であるのに、それを

学校の市場に出された商品であるかのように錯覚し、そのうちに学校によって孤立化され、疎外されてしまうとイリイチは言った。そうして人々は自主独立的に成長するための動機を失い、そして関連性に魅力を感じなくなる。彼らが学校で失ってきたものを自覚させ、職業訓練の場でそれを補っていかねばならない。

## 5. キャリア形成の多様化

システムの寿命と技能・技術の継承についてのキーワードに「封印技術」がある。システム全体を知らない者が、改善・改良という名のもとにシステムや技術に変更を加えてはいけない。今あるものには変更を加えないというのが、工学院大学教授畑村洋太郎氏の言う「封印技術」である。原発や某食品会社の事故などは、システムの全貌を理解しない者がシステムに変更を加えた結果であろう。若い技術・技能者たちの使命には2つあると同氏は言う。1つは封印を守り続けることであり、もう1つは封印が解かれるまでに新しい封印技術を開発しておくことである。このような役割を担う技能者・技術者を指導育成していくことが、今後の職業訓練の重要課題となるだろう。途絶えてしまった技術や技能を復活させることは非常に困難である。できるだけ多くのDNAを保存して将来に備えるDNA研究のように、今では必要のなくなりつつある技能・技術を保存・継承しておくことは、先が見えない時代であるが故に、行政がイニシアティブをとって進めていかねばならないのではないか。

また一方では、バウンダリーレス・キャリアが能力開発のキーワードになっている。この新たなキャリアは、マニュアル・ワーカーからナレッジ・ワーカーへの労働力市場のニーズを背景にしており、対人スキルが重要視されるという。バウンダリーレス・キャリアは、新たなキャリアのハイブリッドを生むことにより、硬直化した市場を再び活性化させるだろう。これからの公共訓練にあっては、バウンダリーレス・キャリアというハイブリッドをつくり出すこと、そして効率が悪く短期間では育成できないために市場原理の枠には収まりにくい、スキルの

純粋種の保存・継承という役割を担っているという自覚が必要となろう。

そしてキャリアの多様化は、キャリア形成の評価基準をも多様化する。出世や報酬に向かってキャリア・アップすることだけを目標としないスロー・キャリアが注目されているように、キャリア形成の要素は多様化し、その結びつきは複雑化するのである。上昇志向ではなく、面白いと思う仕事にとことん取り組む、そういうキャリア形成のやり方は市場原理の発想からは生まれにくい、何が勝ち負けを決めるのか、その判断さえ内的キャリアに含まれるということなのであり、キャリア支援にかかわるということは、あらかじめ決められた基準によって支援するのではなく、それぞれの個性に合ったキャリアの基準による自己実現と自立を促すことでなければならない。制度によって一律に支援することでは、フリーターやニートの問題は解決しないのではないか。イリイチは物質文明における価値観がすべてではなく、異なった価値観が存在する多様で複雑な社会でなければならないと説いた。成長を志向する社会と、伝統的な生活の自立が文化の型によって構造化された社会とは対立するものではない。貧しい社会と豊かな社会とを対等の関係に置くことができる社会が到来したのである。構造主義人類学が主張した異なる基準が認められる時代となったのである。失業もみじめな禍ではなく、有益な権利であるとイリイチは言う。商品集中社会を動かす労働論理は、給料や賃金のための仕事を正当化し、それとは反対に自律的な活動の価値を引き下げる。この論理によらないことは、一見産業社会の役割を担う職業訓練の意義とは異なるように思えるが、これからの公共訓練には、人間性の疎外を防ぐためにさまざまな価値観を包含していくことが求められていくであろう。

イリイチは2002年76歳で他界したが、フリーターやニートの問題にしても、イリイチなら制度や市場原理に委ねることなく、社会のエートスの変更を求め、科学技術がつくり出した既成概念から脱却することで前進しようと試みたのではないだろうか。